

ゑにし

日蓮大聖人御真筆写

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部  
〒130-0001  
東京都墨田区吾妻橋 2-2-10  
TEL 03(3622)5086  
FAX 03(3829)2766

第378号

光久御住職御書講義

# 新池殿御消息

其の上遠江国（とおとうみのくに）より甲州波木井の郷身延山へは道三百余里に及べり。宿々のいぶせさ、嶺に昇れば日月をいたゞき、谷へ下れば穴へ入るかと覚ゆ。河の水は矢を射るが如く早し。大石ながれて人馬むかひ難し。船あやうくして紙を水にひた（浸）せるが如し。男は山がつ、女は山母（やまうば）の如し。道は繩の如くほそく、木は草の如くしげし。かゝる所へ尋ね入らせ給ひて候事、何なる宿習なるらん。釈迦仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王は身に随ひ、日月は眼となりかはらせ給ひて入らせ給ひけるにや。ありがたしありがたし。

（御書一三六六頁）

## 《通釈》

その上、遠江の国から甲州の波木井郷・身延山までの道程は三百余里もあります。道中にある宿場はいずれもままならない。峠は高く日月に手が届くかと思われ、谷底へ下れば穴の中に入るかと思われるほどです。河の水は矢を射るように早く、大きな石が流れ人や馬が渡るのは困難です。船であっても危険で紙を水につけたように頼りないものです。男は木こり、女は山姥のようなものしかおりません。道は縄のように細く、木は草のように茂っています。このような所まで訪ねてくださった事はどうな宿習でありましょうか。釈迦仏は貴殿の手を引き、帝釈天は馬になつてくださり、大梵天王は身に随つてくださり、日天・月天が眼に成り代わつてくださつてここまで来られたのでしょうか。とても有り難いことです。

## 解説

前号に引き続き、本抄を講義させていただきます。今回の箇所は本抄の結びにあたり、大聖人様は「申し上げた事はまだまだありますが、このほど風邪にかかり体調が思わしくありませんので筆を置きます（趣意）」と、お体が悪いにもかかわらず、困難な道のりを越えて登山された新池殿の労をねぎらつておられます。私たちが総本山大石寺へ登山する際に、このように大聖人様からお褒めいただける志を持つていられるでしょうか。

私たち妙縁寺壇信徒は東北や関西にお住まいの方を除いて、総本山大石寺から比較的近く、交通も不便なく登山する事が出来ます。

第二十八世日詳上人様は『四節三益筆記詳師隨聴記』（富士宗学要集十巻三十二頁）に釈尊在世の在家信者である八十余歳の維摩詰（ゆいまきつ）が釈尊の御説法を拝聴したく参詣された。維摩詰の家から釈尊がおられる所まで四十里（約百六十キロメートル）あり、その姿を釈尊は称え、仏法の教えを拝聴するために歩みを運んできた功德は、四十里を歩く過程で足が踏んだ地面の土を取り、それを細かな塵とする。その塵の一粒を一劫（二千六百万年）の

間に作った罪障と数え、その踏んできた上の分だけの罪障が消滅したのである。その功德により、生まれてくる度に仏様にお値いする事が出来る。このように説かれている事を今の時代に当てはめれば、戒壇の大御本尊様のまします所が仏様が説法を遊ばす靈鷲山であり、富士大石寺に参詣して南無妙法蓮華経と唱える事が、釈尊在世の維摩詰に劣らない功德となるのである、と御指南あそばされています。

ですから、「お山は年に一度登山すれば良いだろう」という考えでは、それは本当の信心ではありません。遠い所から参詣している方は、それだけ大きな功德を積めている事を自覚し、大いに喜ぶべきであります。まして、総本山の近くに住む私たちは、交通を不便なく登山させて頂ける事に感謝し、年に三回行われる支部総登山やその他の登山会に積極的に参加し、無始以来の謗法罪障消滅をさせていだいて功德を積むべきであります。

残りの支部総登山、家庭訪問を進め、まだ一度も登山してない方や今年に入つてまだ登山してない方に声をかけ、功德に満ち溢れている総本山大石寺に参詣し、共々に大聖人様に御目通り中し上げましょう。

（文責・編集部）